＜巻頭言＞

部分から全体へ

「真理の探究」を目指す学問を学ぶ意義は、それが自然科学であるにしろ、社会科学であるにしろ、自己の生きている「状況」を理解することにある。しかし、何のために自己の生きている「状況」を理解しようとするのかといえば、それは自己がどのように生きていくかを考えるためにある。したがって、学問を学ぶことは、いかに生きるべきかを省察することにほかならないのである。

しかし、真理を探究しても、真理の究明は見果てぬ夢であることを覚悟しなければならない。確かに、ルネサンス以降、真理の解釈は、宗教から科学へと移った。しかし、科学は真理を語っているかといえば、そうではない。科学は真理を語っているかの如くに思われるのは、考える対象を限定して、部分真理しか語ろうとしないからである。逆に科学が過ちを犯すのも、部分にしか眼を向けず、全体を意識しようとしないからである。

もちろん、まず全体真理を説こうとすれば、宗教のように神秘の世界に迷い込んでしまう。そうだとすれば、学問を学び、「真理の探究」を志そうとすれば、自己の考察する部分と、その周囲の部分とを、全体像を意識して突き合わせていく努力を積み重ねていく必要がある。

この『社会事業研究』が取り上げる第57回の社会福祉研究大会を振り返ると、部分と部分とを突き合わせながら、全体を意識する必要が浮かび上がってくる。第57回の社会福祉研究大会は「子どもの貧困」に焦点を絞りながら、「人に向き合うソーシャルワーク」をテーマとして開催されている。しかし、「子どもの貧困」といっても、ただちに国民は理解することができない。子どもは豊かな生活をしていたとしても、子ども自身には所得が無いのが通常だからである。

「子どもの貧困」とは「等価可処分所得が貧困線に満たない子どものこと」だと説明されたところで、どれほどの国民が理解できるのか疑わしい。研究者は言説を弄ぶことを慎み、後藤新平が指摘したように、「通俗」つまり専門家ではない社会の構成員にも十分に通じる学問を奨揚しなければならない。とりわけ、社会福祉学にはそれが求められると考える。

実際、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を見れば、子どもの貧困対策では、子どもの生育環境を念頭に置いている。つまり、子どもの生育は、社会の義務という理念が確立していない日本では、劣悪な生育環境によって、子どもの将来が左右されないように、生育環境を整備することが、子供の貧困対策とされている。

しかし、あいりん地区における現場体験にもとづく、荘保共子さんの基調講演を拝聴しても、劣悪な生育環境に対症療法的対応をしても、「子どもの貧困」という社会問題は克服されないことがわかる。つまり、「子どもの貧困」というジグソーパズルの小片だけではなく、その周囲の小片にも目配りし、有機的に関連づけた体系的な対策を構想しなければならないと考えられる。

「子どもの貧困」という社会問題が生じてくる背後に存在する貧困や格差の問題にも取り組み、さらに貧困や格差が溢れ出ることによってもたらされる人間と人間と紐帯の分断にも対応しなければならない。そのためには部分的な問題解決的対応をとるにしても、ヴィジョンを描き、部分と部分を関連づけなければならないのである。

今回は大会のテーマは「人に向きあうソーシャルワーク」である。それはヴィジョンを描く方向性を、「人に向きあう」という言葉で表現したものといってよい。もちろん、ここで言う「人」とは、人間の身体性を意味しているわけではない。それは総合性を備えた人間の存在を意味している。言い換えれば、ソーシャルワークが前提とする人間観だということができる。

今回の大会から私が学びとったソーシャルワークの人間観は、二つの点に要約できる。

第一は、すべての人間の存在を社会は必要としているということである。つまり、社会が必要としていない人間は存在しないということである。

第二は、社会の構成員の運命は共有され、すべての社会の構成員が、その運命に連帯責任を負っているということである。

ソーシャルワークが想定する人間観を求めながら、個別の部分への対応も、全体性のなかでの意義を見い出そうとしつつ、実践していく必要がある。

2019 年 1 月

日本社会事業大学社会福祉学会会長
日本社会事業大学学長
神　野　直　彦